

■ エッセイ ■

■ 寛 ■

■ 悟 ■

—ペーパーとデジタルの競合と共存—

出版不況克服の鍵 or 最近の出版業界事情

出版業界は大きな曲り角に立っている。

売り上げ額が顕著な減少傾向にあり、止まる兆しは見えてこない。曇時々雨の業界予報がどしや降りに急変しそうだ。関係者の悲鳴すら聞こえてくる。ピーク時二兆六千億強もあつた売り上げ額が、昨年度は二兆数百億に激減している。六千億はどこへ消えてしまったのか。まさに非常時である。先日発表された業界最大のK社の決算が過去最大の赤字決算となり、同じグループに属する某社の経営環境悪化も伝えられている。この手の話は枚挙にいとまがなく、企画の相次ぐ中止、倒産した会社から出版予定の単行本も引き受け手がないという厳しい現実もある。このまま手をこまねいて座視していいのか。

我々は次なる〈金脈〉を見つけ出さなくてはいけない。これこそが出版再生の鍵である。

この金脈からの微光がどうやら見え始めてきたようだ。マンガも含めてどん欲に吸収している分野の出現である。

今年届いた年賀状に次のような文面があつた。「デジタルコンテンツに関わることなく、社長を定年退職することは幸せです」友人の大手出版の子会社社長は、よほどデジ

タルに頭を悩ましていたのだろう。しかし、この言葉は出版の将来をシンボリックに物語っている。

それは「ペーパー（紙媒体）とデジタルの競合と共存にこそ出版は生き残れる」ということだ。

ぼくは『広辞苑』（岩波書店）を三つ持っている。本来のペーパーの厚いものと、電子辞書、さらにはケータイに有料登録している。家では電子辞書を、外ではケータイから検索している。ペーパーはというと、本棚に置いたままである。ケータイの利用料は月に一〇五円だ。安いか高いかというより、利便性を取ってしまう。このことが競合、共存の身近な例であるが、ぼく自身はあまり抵抗感はない。自然に使い分けているのかもしれない。

マンガの世界はどうであろう。

マンガ、アニメ、ゲーム、放送、音楽、映画、文芸などの知的生産物を総称してコンテンツというが、その市場規模は十四兆。マンガは五千億の市場であるが、コンテンツの下支えであることは不変である。マンガの商品化権、ライセンス収入等は、マンガが本質的にもつエンターテイメン

トとしての先兵的役割りから生じる。一步先いや半歩先の時代の気分を剥ぎ取り、多くの作品を生み出してきた。しかし、「少年ジャンプ」が六五〇万部を記録してから十年余、マンガ界全体は大きな負の遺産ともいふべきものを引き継いでいるからである。人気投票至上主義、人気作品の過剰な模倣、編集者の質の低下、雑誌としての特性放棄など。単行本頼りが雑誌と単行本の売り上げ逆転をも生んだ。雑誌は死んでしまったのか。コトは深刻である。

ケータイ人口は約八千万人。ケータイマンガは二〇〇六年夏に誕生した。まだ二年あまりである。ケータイマンガを読んでいる割合は三%だが、確実に読者を獲得している。約二四〇〇二五〇万人のユーザーが、一話十円から五十円で、あるいはパケット料金を払い、自分の好きな作品を「いつでも、どこでも自由に気軽に読める」のである。

マンガ配信サイトは一〇〇社ほどあり、大手が数社で平均約一万台を提供している。全体で十万〜十五万台のダウンロードができる。一台のケータイには書店もコンビニもマンガ喫茶も新古書店も入っている。売り上げは三〇〇億と推定される。まさに倍々ゲームで市場が形成されつつある。

ぼくが編集プロデュースをしているサイトの想定読者は二十才の男子。だが女子が七割も占めている。午後九時か

ら午前二時頃に集中しているようである。予想外である。出版の歴史は予想外のことが多くの成功をおさめている。

我々が取り組んで配信しているのは、新作フルカラー作品である。これは世界向け配信を視野に入れていからであり、すでに動き出している。各社とも作品のカラーリングはすでに終了しているようだ。新作フルカラーのアドバンテージがようやく浸透してきている。

東京市ヶ谷専門学校でSさんの作品を読んだ衝撃は今でも忘れない。三年前のことである。マンガの描線が三つも四つも描けるのだ。一作品にキャラが四人登場するとして十六人も描き分けられるのである。驚異の才能だ。いずれはプロデビュースさせるべく、大物作家のFさんにアシスタントとして送り込み、二年近く修業させて、ケータイマンガでいきなりデビューをさせた。ロボットが主人公のラブストーリーであるが、時間をおくことなく一万五千作品中ランキング一位を獲得した。これがペーパーとはちがう。知名度は関係ない。作品次第で質が良ければ一〇〇万単位のダウンロードが殺到する。ケータイマンガが一時のバブルか、あるいは出版の金脈か、まだ結論は早い、少なくとも熱気だけはペーパーを焼き尽す勢いだ。でもぼくはペーパーが編集者としてのアイデンティティであることは変わりはない。

(別府大学客員教授・元少年画報社編集者)